
復讐の姫君

風神玲衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐の姫君

【Nコード】

N 8 6 9 2 M

【作者名】

風神玲衣

【あらすじ】

僕は見つけた。

二年前の事件の被害者を。彼女は自らを『復讐姫』と名乗り、他人の復讐を請け負いながら過ごしていた。

だがしかし、彼女は自らの復讐を果たしていない。

僕は、彼女に復讐を果たしてもらおうと思う。

そうすることで、彼女も、僕も、未来の被害者も、救われると信じて。

プロローグ（前書き）

この作品は残酷な表現が目立ちます。
苦手な方はお気をつけください。

プロローグ

君は、『復讐』ってしたことあるだろうか？

『復讐』だ。いわゆる報復行為と呼ばれるもの。

最近『報復行為』って言葉を辞書で調べてみた。
まあ、あまり詳しくは覚えてはいないが、だいたい仕返しをするってことで意味は通る。

いや、別に深い意味があって聞いた訳じゃないよ？
ただね、僕の身近なところにね、『それ』を生業としているような人がいて。

うん？

それと、今の質問に何の関係があるかって？

うーん……。そう言われても、ねえ？

確かに、僕の身近にそんな人がいるからって、君にこんな質問をする必要はないんだけど……。

あ、でもひとつだけ。

あんまり人に迷惑かけちゃダメだよ。

それこそ関係ないだろ？

いやいや、僕にとってはこれこそ関係大有りだ。

だって、人に迷惑をかけるってことは、『復讐』の対象に成りやす
いってことだから。

ま、気をつけてね。

彼女、『復讐』に関しては手段なんか選ばないから。

どういうことかって？

あれ、最初に質問してたのは僕の方なのに。
なんだか面白いね。

ああ、そうそう。なんでそうなるのかって質問だったよね。

……ああ、でももう遅かったかな。今教えても、後の祭りになるだ
けだし。

早く教えろ？

なら、後ろを向いてごらんよ。

君は今、『復讐』されるんだ。

彼女によって、ね。

「とある非日常の日常」

真つ暗闇の路地裏。街灯も届かず、月明かりが若干入るも目が慣れていない僕にはただの闇の塊にしか見えないそんな向こう側から、今正に一人の少女がこちらに向かって来た。

僕は彼女に歩み寄り、

「お疲れ様」

そう言った。闇から出て来た彼女の目は、しかしまだ闇を映し出している。

その瞳で僕を一瞥したかと思うと、何かが塗りたくられたような使い古されたナイフを投げ渡してくる。

「……帰る」

無機質にそう呟くと、フラフラとした足取りで僕の横を通り過ぎる彼女。

僕はナイフをパチンと開き、その際に飛んだまだ生温い液体をナイフから指で掬い取ると、用意していたハンカチでそれを拭い取った。

「シャワー借りる」

「どうぞ」

とあるマンションの一室、彼女――穂積 晶――は、赤い染みが出
来た上着をソファ―に投げ捨てて風呂場のドアに手をかける。その
様子を、背景のように眺めていると、

「報告、しといてよ」

別段僕を見るわけでも無く、そう言っただけ扉の向こうへと消えていっ
た。

「ハイハイ、と」

僕はポケットに入れていた折り畳み型ナイフを机へと置き、

「あ、換えないとダメだ」

赤く染まってしまった手の包帯に気が付き、パソコンがある机に座
って、一段目の引き出しを引いて中から包帯とハサミ、それにテー
ピングを取り出した。

投げられたものだから、思わず手で受け取ったのが失敗だった。

「さ、て、と」

慣れた手つきで両方の手の包帯を換え終えて、僕はパソコンを起動。
とあるサイトを開く。

サイトの名は、『ふくしゅうきのにつき』だ。

そこには、なんの変哲もない、本当にただの日記が記されている。

が、当然ながらこれは本当の姿ではない。

画面を下へ下へとスクロールさせ、一番下にある錆び付いたナイフのマークをクリック。

画面には、『パスワードを入力して下さい』の文字。

カタカタとキーボードに指を走らせ、パスワードを入力していく。

パスワードは、『ふくしゅうき』と『ほづみあきら』と『さびたないふ』。

全てを入力し終え、エンターキーを押す、と、画面が数秒してから変わる。

サイト名は『復讐姫の日記』。ログインするとサイトの名が変わるのだ。

内容も、あのほのぼのとした当たり障りのない日記とは百八十度違う。

僕は、サイトの『依頼コーナー』にある、一番新しい項目をクリックした。

画面が移り変わり、現れるのは長々と綴られた『ある人物』への恨みの言葉。どんな見た目で、どんな性格で、どんな服装で、どんな顔で、どういう風になぶりたくて、どういう風に蔑みたくて、どういう風に殺したくて……………。

そんな、じつと読んでいたらこちらがどうにかなりそうな文字の羅列が続いている。

「普通の人間なら、だけど」

ミネラルウォーターを流し込み、キャップを閉めずにパソコンの横

に置く。どうせすぐに飲み干すのだから必要ない。

マウスを下へと何回もスライドさせ——新しいマウスでも買おうか——『返信』の二文字をダブルクリック。

『文章を入力してください』の文を消し、マウスから手を離して、過去に何度も何度も打ってきた文字を入れる。その速さたるや、僕が褒めたたえる程の速さだ。結局のところ自己満足。

『復讐は完了しました。確認出来ましたら復讐代金を指定の口座にお振り込み下さい。貴方に平穩が訪れますように』

「——なんてね」

最後の一文は、僕が気分で付け加えるおまけのようなものだ。今回のように宗教じみた言葉もあれば、いたずらに振込みを促す脅迫まがいの言葉を打ち込むこともある。

まあ、振込みが無かったら、その人が新しい『対象』になるだけなんだけれど。

半分近く残っていたミネラルウォーターを飲み干し、ダストシュート。

「あ」

外れた。うん、明日はいいことあるかも。

椅子から立ち上がってペットボトルを確実にごみ箱に叩き込み、その足で冷蔵庫に向かう。

新しいミネラルウォーターを取り出し、また半分近くまで飲んでキヤップを閉めずに机に置いて椅子に座った。

「また水……他に飲むものは無いの？」

「飲みたいなら野菜室をご覧あれ。君用のジュースが山ほど入っていますとも」

「私じゃなくて……いいや、もうっよ」

風呂場から出て来た晶と背中を向けたまま会話。多分また無防備な格好をしているんだろう。

そう思っただけのことを言うと、

「大丈夫。ここはあつたかいし」

なんてズレた答えが返ってきた。これも日常茶飯事だから慣れたものだが。

パキパキとキャップを回す音を聞きながら、僕はサイトを眺める。ひらがなの方だけど。

たまに明らかにおかしいコメントを入れてくる人がいるので、その見回りだ。見付けた場合は、それとなく『パスワード』を教えるのも一つのサイトに引き込まなければならない。

ちなみに、普通の人がもう一つのサイトに入るためのパスワードは『ふくしゅうき』の一つだけだ。残り二つのパスワードは、運営側であるこちらの為のものだ。

「いたいた。なかなか染まってる人だ」

『ふくしゅうきにつき』の今日の更新分である、なんの変哲もない世間話に、明らかにおかしいコメントを返している人物が一人。『本日作ってみたデザート』に対する返しが『復讐復讐復讐復讐以下略』だ。全く、狂ってるな。人のこと言えないけどさ。

「どう？新しいの、来てる？」
「今見付けた。引っ掛けてみるよ」

いつしか僕の隣に来ていた晶が、湿った髪を垂らしながら話し掛けてきた。服装は、裸にブカブカのワイシャツときたか。今日は一段と大胆なことだ。

パソコンに意識を向け直し、僕はコメントにコメントを返す。こういう奴は、大体パソコンの前から動かない。一瞬だけで充分だろう。

『パスワードはふくしゅうき』

二秒程経ったところで、元のコメントごと二つとも削除。すぐに下へと画面をスライドさせ、パスワードを打ち込みサイトへジャンプ。

そこで一旦目線を切り、ミネラルウォーターを飲み干してダストシユート。今度は入ったので、明日は何もないっぽい。

「てかそれ僕のワイシャツ」

「気にしない」

「いや、晶が気にする立場じゃないだろう……と、手の早い人だな。きつとタイピングの資格持ちだ」

気が付けば依頼欄には新しい項目が増えていた。マウスを動かし、ダブルクリック。

「……明日も早く帰ってこれる？」

「迎えに来てくれるなら」

「了解」

どうやら、明日も『復讐姫』は休みが無いらしい。

〔木田 康介〕

「ふう……」

エンジンを切った車内で、暇を持て余して身体を伸ばす。時計を見て、そろそろ学校が終わる時間に差し掛かることを確認。トントンとハンドルを指で叩き、意味なくリズムに乗ってみる。音楽は頭の中でセルフサービスだ。

「お、来たな」

チャイムの音が聞こえ、同時に生徒玄関から他の生徒と談笑しながら出て来る晶の姿を確認。エンジンをかけて、微かな振動を感じながら晶を眺める。

晶は屈託のない笑顔で友達と話しながら車へと近付いてくる。その姿は元気ないまどきの女子高生そのまま、おかしいところなど微塵も見当たらない。

僕にもあんな笑顔を向けてくれればいいのに、なんて思ってもいいことを口にしてみる。

僕からしてみれば、あの晶は晶じゃないのだから。

「じゃあねー！また明日！」

「ゴメン！明日は学校休むんだあ」

「ずる休みか！」

「へへへ、さあどうでしょう」

「もー、ごまかさないでよ」

「アハハ、じゃあね」

助手席に乗り込み、ばたん、と扉を閉める晶。同時に僕は車を発進

させ、車道へと踊り出る。

横目で見た晶の表情は、先程までとは別人の様に冷めていた。

「対象は？」

抑揚の無い無機質な声に、僕は目を細めて車道を睨んだ。全く、恐ろしい。

「最近噂の、バラバラ殺人事件は知ってるかい？」

「知らない」

「今回の対象は、その容疑者である木田 康介^{きだ こうすけ}だ。一度は逮捕寸前までいったらしいんだけど、木田はその場にいた警察官、一般人諸々を切り付けて逃走。今はこの町の民家に逃げ込んで息を潜めているらしい。依頼人は……多分事件の被害者の家族が誰か」

あまりにも文章が破綻していて、依頼人の情報が入ってこなくてね、と続けておく。

「場所はわかってるの？」

「ああ。この街に住んでる事情通の探偵さんがいてね。彼に頼んだら一発でわかった」

なかなか紳士な人間だったが、あの人はあれでどこか人より飛び抜けた何かを感じる。ある意味では僕と似ている気がする。まあ、僕は彼と違って『飛び抜けた』ではなく『踏み外した』が正しいけど。

そんなどうでもいいことを考えながら、信号機に従いブレーキを踏んで停止。ハンドルから手を離し、前にあるミネラルウォーターに手を伸ばす。

と、その時、視界の端に入った晶がある方向をじっと見詰めていた。

手を伸ばしたその体勢のまま、晶の視線を追っていくと……。

「ねえ」

「食べたいって？……なら、今日の晩飯はあれになるけど」
「……………」

沈黙。つてことは構わないってことか。

伸ばした手をハンドルに戻し、半ば強引な方向転換の後、フライドチキンのドライブスルーに車をつけた僕だった。

「ポテトは三つね」

「……………はいはい、と」

晶を僕のマンションの前で降ろし、買ったばかりのフライドチキンを手渡す。

「じゃあ、夜には帰るから。先に食べてて構わないからね」

「冷めるよ」

「いいよ別に。晶こそ、冷める前に食べた方がいいよ。じゃあね」

窓を閉め、アクセルを踏んで発進。

ちらつとミラーを見るも、すでに晶はこちらから視線を切っていた。

特に何も思わずに、僕はスピードを上げていった。

「……かな？」

住宅街の道の脇に車を止め、エンジンを切る。

反対車線の向こう側、何の違和感も無く建っている民家。

僕はそれを、手元の紙と見合わせて、紙に書かれている家とここにある家が同じものだと確信した。

「しかしまあ、よくここまで細かく調べられるな。どんな手段で調べてるんだか」

紙を助手席に投げ捨て、座席を軽く倒しながら呟いた。

投げ捨てられた紙には、住所、住んでいる家族、さらには周辺の地図から建物のイラストまで書かれている。助かるには助かるのだが、ここまでくると向こうは暇人なのではないかと疑いたくなる。

まあ、こんなことを考える僕も、大概暇人なのだろうが。

「しかしまあ、なんだ。詰めが甘いというか」

片目だけ手で隠し、対象が隠れ住んでいるであろう家を見つめる。ポストには、何日分になるのか、新聞がぎっしりと詰め込まれてい

る。

あれでは配達員もさぞ苦勞しているのだろう、もしかしたらもう入れるのを諦めているかもしれない。

「……配達員のことまで考えてどうするよ。やっぱり僕も暇人だな」
くだらないことを考えるのを止め、僕は座席に背中を預け、玄関の
みを見ていることにした。

一時間程経っただろうか、少し暇になってきた頃、玄関が少し開いたのを見逃さずに双眼鏡を眼に当てる。

「……あいつが木田だな？予想通りやつれてらっしゃる」

木田はほんの少し開いた玄関から顔だけを出し、辺りをキョロキョロと見回している。こちらに目をやることもあったが、特に人目は無しと判断したのか帽子とサングラス、さらにはマスクとベタベタな格好をして外へと出て来た。

「ふうん……」

木田がキョロキョロしながら歩いて行くのを眺めながら、ミネラルウォーターを喉に流し込む。

あれだけキョロキョロしていたら、自分が不審者だと言っているよ

うなものだ。逃げ切るつもりなら、もつと誰かさんみたいに堂々としなきゃ。

その誰かさんが誰かとは言わないけれど。

まあ、どこに住んでいるかも確定したし、あれだけきよどつていればいざという時に逃すことも無いだろう。

「姫のところに帰りましょうかね、と」

エンジンをかけて発進。相変わらず挙動不審な木田を抜き去り、僕はマンションに向かった。

「ただいま」

「……………」

返事が無いのはいつも通り。

真っ暗なもの、まあいつも通り。

……香ばしいチキンの匂いは、たまにしかないけれど。

「晶、節電もいいけど窓くらい開ければ？」

「寒いからイヤ」

「……その解放感溢れる服装で言われてもね。空気入れ換えの時間だけでもちゃんとした服を着てくれ」

「……………」

電気をつけ、こちらを不満げに睨みつける晶に着ていたコートを投げ渡す。ワイシャツ一枚の晶は、それをしばらく見つめた上で羽織っていた。

カーテンを開き窓を開け、少し冷たい風が部屋の中へと入る。

秋特有の空気の中に、どこか身体に染み渡る冬の匂い。

それをしばらくの間目を閉じて感じ、気が済んだ僕は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。

椅子に座って半分まで飲み干し、ソファーに小さくなって座っている晶を見る。向こうもこちらを見ていたらしく、しっかりと目が合った。

特に驚きもせず、口を開く。

「お姫様はいつお動きになられるので？」

「……正直今すぐにでも行きたい」

「それは駄目。今日の深夜まで待とう」

「……………」

睨まれても駄目だ、と意思を込めて睨み返す。すぐに視線を外したのは晶の方。

睨み合いで負けたことは一度も無い。

いつも視線をそらすのは決まって晶の方だ。

晶曰く、『私の大嫌いな奴にそっくりな視線』らしく、僕としてはなんだか複雑な気分でもある。

「こら、まだ閉めちゃだめ」

「……………」

こっそり窓を閉めようとしていた晶にそう言って、僕はパソコンに向かった。

「時間だ。晶」

「わかってる」

パソコンの電源を切りながら振り返る。晶がコートを脱ぎ捨てて、風呂場に向かうのを見届けてから僕は立ち上がった。そういえば窓を開けっ放しだったな。今日は割と暖かったから忘れていた。だからコートをずっと羽織っていたのか。

「……零時三分。まあ、向かうのに十分かかるとしても……」

残りの時間は、多めに見積もって四十五分間。それまでには帰ってこなければ。

「ナイフ」

「はい。急ぐよ」

幾度も使われて切れ味が鈍くなっている折りたたみナイフを晶に手渡し、僕は部屋を出た。

駐車場にある車に乗り、晶が助手席に乗ってシートベルトをするのを確認してからエンジンをかける。

ライトが前方を照らし、周りの闇を一層濃く感じさせる。

一応安全運転で、と口に出し、僕はアクセルを徐々に踏んでいった。

「……………」

他の車がほとんど走っていない道路を、交通規制二十キロオーバーで走っていく。

これが『僕の』安全運転だ。勝手に決めているだけだが。

ちらりとミラーに目をやり、助手席で微動だにしない晶の表情を見ようと試みる。

暗くて見えはしなかったのですぐに止めたが、おそらくは今丁度『復讐姫』に切り替わっている最中だろう。

……無駄な事を考えるのを止めた僕は、さらにアクセルを踏み込んだ。

「ここだ。電気はついて無いけど、高確率で中にいるはず」

「わかった。いつもみたいに君から行って」

「勿論」

木田が隠れ住んでいる家の前に車を止め、特に気配を隠すわけでもない僕ら二人は家の玄関の前に立つ。

「鍵を閉めたぐらいで逃げられると思うなよ……ってな」

ピッキングも最早慣れたもの。

ドアノブを捻り、背後にいる『姫』の気配を感じながら扉を開く。

「……ふむ」

家の中からは、なんとも言えない腐臭が漂っていた。どうも、ここ
の本来の住人はもう現世からさようならをしている様子。

靴をはいたまま乗り込み、真つ暗闇の廊下を歩く。ギシギシと不気
味な音が耳に入り、僕は得体のしれない恐怖でいっぱい……
なんて演出を頭の中で考えても、恐怖なんか沸いてこなかったの
で
すぐに止めた。

「……………ねえ」
「うん？」

珍しく声を出した晶に振り返り、その晶が向いている方向に顔を向ける。

暗闇に慣れた目が捕らえたのは、襖。

取っ手に手をかけ、独特な音と共に開け放つ。

腐臭が、強くなった。

「……………」
「これは、また」

そこにあつたのは、真つ赤な布団の上に転がっているいくつものパ
ーツ。

目を凝らすと、それらは不規則に置かれているわけではないらしい。

「悪趣味」
「……………」

晶が吐き捨てるように呟き、僕はそれに無言で返した。

枕の場所には、頭。

布団の中央には、胴体。

それに繋がるように、四肢がある。

しっかりとそれらが元の場所に収まっているかと言えばそうではな
く、まるで、わざとバラバラであることを誇張するかのように、少
しずつずらして置かれている。

そんな、材料が人の身体であるオブジェが、並んで三体。川の字で置かれていた。

「いこうか。時間が無い」

「……………」

それらから目を切り、晶にそう言って先に進む。

しかし、木田さん。貴方も本当に運が無い。

早く捕まっていればよかったものの、よりによってうちの姫様と関わることになるなんて。

しかも、起こした事件が『バラバラ殺人』だ、なんてね。

点滅する光が漏れている扉を見つけ、僕はその扉を前置きなしに押し開けた。そこには、すっかりやつれ、驚きを隠せない木田の姿がテレビの光が彼を照らし、その青白い顔をさらに不健康に映し出す。

「なっ、なっ……………！」

「木田さん、ですね？バラバラ殺人事件の犯人」

「い、い、いきなりなんだお前！つつ捕まえるってたてそうはいかねえ、お前もバラバラに、ひ、ヒハハ」

傍らに置いてあったのか、すっかり刃零れを起こした斧を握りしめる木田。なるほど、それでバラバラにしたってわけだ。

「捕まえる……………？フツ、貴方、そっちの方が幸せだったかもしれないけど」

僕の横を通り、木田にナイフを向ける晶。その表情はどこか喜びに満ち溢れていて、木田に対する怒りが、簡単に見てとれた。

「バラバラ殺人事件……バラバラ、バラバラ？おかしいね、おかしいね！？アハハハハッ！！」

ケタケタと笑い出す晶に戦慄を覚えながら、僕は壁に寄り掛かった。

「奇遇だね、私のお父さんとお母さんも同じなんだよ？バラバラにされてバラバラされて、関節とかそんなレベルじゃないぐらいにバラバラにされて！！」

「……………！！？」

いきなりの晶の豹変に、木田は思わず後ずさっていた。気持ちは分かる。けれど、その選択は間違いだ。今の内にその斧で切り掛かれば、もしかすると生き残れるかもしれないというのに。

僕がそんなことを考え、目を閉じた瞬間に、晶はピタッと笑いを止めた。

あまりにも不気味な静寂。今、晶の表情はどうなっているのか。

それは、晶と向かい合っている木田にしかわからない。

そして、晶はぽつりと呟いた。

「死んだの」

「……………」

「私の目の前で、数えるのも面倒くさくなるぐらいの数にバラバラにされて、けれどそこに警察がきて私だけが助かって。何もかも失ったくせに、命だけが私に残された」

——数年前、晶が中学生に上がったばかりの頃。

日本中を震撼させた殺人事件があった。

その内容は、インターネットでの書き込みから始まった。

『今日の零時から三日間で三十人バラバラにしてやる』

無名の書き込み。

それを見たネットの住人は、また馬鹿な奴が出てきた、と軽い気持ちで受け流していた。

しかし、その書き込みがあつた翌日の昼。つまり、予告開始時間から十二時間あまりが過ぎた頃。

テレビのニュースには、連続バラバラ殺人事件の報道が相次いでいた。

一日目——十一人。

二日目——十六人。

ありえないペースで殺されていく人間。

一日を残し、すでに予告の三十人まではあと三人。

当然、世間は騒いだ。

明日には、今日には確実に三人の人間が殺される、と。

しかし、結果から言つて予告は達成されなかった。

とある三人家族——犯人は、その家族で予告を達成させるつもりだったのだらう。

しかし、一人娘がいた両親の予想外に激しい抵抗を受け、二人に手間取る間に警察にかぎつかれた犯人は、最後の一人であるその娘を残して逃走。いまだに捕まっていない。

残された娘は、復讐に身を焦がす存在——『復讐姫』として、今も生きているという。

「何か言い残したことはある？　だあれにも届けてあげられないけど、しばらくは覚えといてあげる……」

「ひっ……ひゃっ、あああああ、あ」

木田の断末魔は、まるで途中で途切れたテープのように不自然に途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8692m/>

復讐の姫君

2010年11月24日05時33分発行